

# 広丘に疎開に来た子供たち

今から約70年前の昭和二十年、太平洋戦争真ただ中の日本。

東京から来た子供たちがここ塩尻市広丘の郷原にある郷福寺に次々と疎開しにきた。幼くして両親と離れ離れになり、甘える親もいなかった子供たちには、空腹をかかえて過ごしたつらい記憶だけが残った。未知の地での友達付き合いに苦勞し、シラミに悩まされる日々が続いた。

そんな中、郷福寺で、疎開してきた子供たちと一緒に来た引率の先生たちが子供たちを励まそうと学寮歌、「聖丘学寮の歌」を作った。歌には青空の下の畑作業や広丘野村の子供たちとの遊ぶ様子、炊を手伝う姿などが盛り込まれ、「父母の声風がはこぶよ」などの子供たちの御愁も表現されている。

この歌を、地元の子供たちと疎開してきた子供たちが歌い、郷福寺には明るく軽やかなメロディーが響いていたという。



東京から来た子供たち

2014年、数年前に山梨県で見つかった楽譜の複写が届き、郷福寺で毎年開かれているコンサートでソプラ/歌手の柳沢章子さんによって69年ぶりに寮歌が本堂で歌われた。元児童の女性を含む約130人が訪れ、当時の広丘村の情景が目に見え、明るく優しい歌に耳を傾け、平和の尊さを改めて感じていた。

<市民タイムス(平成27年 7月31日、8月10日、平成27年 9月6日)から引用>

<学習を進めてきて感じる事>

戦後、日本は目覚ましい発展を遂げて今に至る。しかし、今私たちがこうして平和に暮らしている間もどこかの国で戦争がおこっている。学習を通して戦争の実態を改めて身を感じる事ができた。日本でも昔、たくさんの命が犠牲となった戦争が行われた事、そして私たちが今住んでいるここ広丘も戦争に関わっていて、こんな歴史があったという事を知っていてほしい。そして、平和の尊さを噛みしめてほしい。

# 広丘に疎開に来た子供たち

□